



Title	日本貿易産業博覧会(神戸博, 1950年)における新制作 協会建築部の活動
Author(s)	船曳, 悅子
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本貿易産業博覧会（神戸博、1950年）における 新制作協会建築部の活動

船曳悦子／岐阜市立女子短期大学

1. はじめに

日本貿易産業博覧会（通称「神戸博」以下の記述はこれを用いる）は、1950年に兵庫県と神戸市の共同主催で開催された。神戸博は新制作協会建築部が手がけ、斬新なデザインを展開したことが指摘されることがあったが、詳細については明らかではない。本発表では、神戸博の計画策定までの経緯と会場計画の具体的な内容を明らかにした上で、同協会建築部の活動における神戸博の意味を考察する。

2. 神戸博の会場設計委嘱経緯

神戸博の構想は、神戸市長・小寺謙吉（1877-1949年）の1948年の発意に始まる。小寺は博覧会を地方振興策として位置付け、産業振興と市民の精神作興という復興の両側面を企図した。小寺個人の博覧会構想は市、県、商工会議所との連携の約束を取り付け、「神戸博準備協議会」（1949年4月19日）、「神戸市博覧会調査委員会」（5月1日）、「企画協議会」（6月2日）、「博覧会協会」（6月3日）が設置される。しかしこれらは公式経緯であり、それに先立つ原案作成に新制作協会建築部は深く関わっていたようである。

新制作協会は、帝展改組（1935年）に反対する猪熊弦一郎（1902-93年）、小磯良平（1903-88年）、脇田和（1908年-）によって1936年に結成された美術団体で、1949年に猪熊が中心となり「美術と建築の総合」を目的として「建築部」を設置した。そして、猪熊は山口文象（1902-78年）と語らい人選を進め、岡田哲郎（1901-83年）、谷口吉郎（1904-79年）、前川國男（1905-86年）、吉村順三（1908-97年）、丹下健三（1913年-）、

池辺陽（1920-79年）の参加を得た。建築部設立後まもない1949年、神戸博会場設計を建築部で受けないかという打診が、同協会会員で神戸在住の小磯良平を通じてもたらされた。小磯と神戸市長の小寺は縁戚関係であった。こうしたことから、神戸市長になった小寺が、東京美術学校を卒業して神戸に戻っていた小磯に自らの博覧会構想を語り、小磯もまた自ら所属する美術団体の新動向をその構想に関わらせようとしたことが伺える。また、小磯は小寺在職時以前から「みなどの祭り」のポスター制作、「兵庫県文化賞」（1950年）を受けておりことから市や県との関係でもすでに地名の立場であった。これらより神戸博の設計者選定において小磯が一定の役割を果たしたと思われる。その後、神戸博が東京の新制作協会に委託されたことは、地元の建築界に波紋を投げかけ、結果的に主要パビリオン10棟のうち3棟が渡辺節（1884-1967年）、置塩章（1881-1965年）、東畑謙三（1902-98年）ら関西の建築家によって設計された。

3. 新制作協会建築部の会場設計と小池新二の博覧会シナリオ

神戸博は、国内博覧会として初めて「テーマ展開方式」が採用されたといわれている。この方式を主張し、これに沿った「シナリオ」を立案したのが小池新二（1901-81年）である。「シナリオ」とは、博覧会全体にメインテーマとして「日本の経済復興と豊かな国民生活の実現」を掲げ、そのテーマを実現するために「序曲」「資源」「世界」「生産」「通商」「文化」「終曲」の7部に分けられた。新制作協会建築部はそのサブテーマをパビリオンの

コンセプトとして空間化し、主要パビリオンを計画した。「終曲」にあたるテーマセンターには、平和の象徴として「ほほえめる女神像」が同協会彫刻部の会員によって制作された。

一方、王子会場の敷地は北側に登る傾斜地であったが、予算削減のため新たな整地をせず、原地形の特徴を活かしつつも、観客の歩行負担を軽減することが神戸博施設部の要求であった。同協会建築部はこれに基づいて会場の最も低い位置を出入口として、テーマセンターを中心に右回りの循環経路をとり、パビリオンを配置した。

会場配置図を見ると実施案に至るまでに4転している。初期案では、パビリオンは狭い通路を中心とした空間であったが、実施案に近づくにつれ、パビリオン内部に回遊性が確保されていく。その結果、スロープ、吹き抜け、光井戸など変化に富んだ空間が出現した。そして、それらの空間に写真と文字を大胆に組み合せた壁面展示や立体と平面をたくみに組み合せた効果的な展示がなされた。

パビリオンとパビリオンをつなぐ移動空間には、同協会彫刻部制作の「主題立像」が配置され、視覚環境としての位置付けがなされている。バタフライ屋根のパビリオンやプロムナードには吊り構造による立体交差、序曲館の渡り廊下には連続ヴォールトなどが用いられ、新しい構造技術がデザイン要素として視覚環境に配慮した造形性が認められる。ポールに掲げられた旗、パビリオンには明るい色調が用いられ、博覧会として新鮮さとともに祝祭性を醸し出していた。そこには、ビューポイントとランドマークの効果的な配置における建築家と美術家の連携が認められる。

4. 新制作協会建築部の消長における神戸博設計の意味

新制作協会建築部の活動における神戸博会場設計の意味を検討するために、新制作協会

の活動を概観する。同協会の中心的な活動は、毎年秋に東京都美術館で開催される新制作展である。展覧会の会場構成については建築部の会員が手がけていた。建築部が、SD部(1969年)に改称するまでの21年分の展覧会を見ると、出品作品の多くが実施作もしくは実施を前提にした計画案であった。そして、建築部設立会員で展覧会出品者は池辺を除き1960年前後までの参加といえる。こうした実態は、展覧会出品の内容に如実に反映している。1953年までは都市計画・建築に類する作品が一定数あったが、それ以降は減少していく。一方で、家具作品が増加する。それらの出品者の多くは非会員だが、後にプロダクト・デザイナー、インテリア・デザイナーとして業績をあげる人々が含まれていた。

このような展覧会での活動形態に対して、神戸博後に建築部が手がけた大日本製糖堺工場(1953, 54年)の設計は、設計管理業務において会員同士の協同が行われた。しかしながら、それは神戸博のように美術家と建築家が協同をめざし取り組むような性質のものではなかった。これ以降に新制作協会の名を冠した設計活動は行われていない。

5. おわりに

神戸博開催計画は、小磯良平の介在により建築部を設立したばかりの新制作協会にいち早くもたらされた。同協会建築部への設計依頼については地元建築家から批判がおこったが、結果的には小池新二の「シナリオ」に基づいた会場設計と展示が行われ、建築と美術の協同をめざした新制作協会の意図が博覧会空間として一体となり出現することになった。

神戸博後の新制作協会建築部があくまで個人活動を持ち寄って展覧会を開催するものであったことを勘案するなら、神戸博の会場設計は同協会建築部の活動中のハイライトだったといえよう。